

橇を作る

極地での旅行には橇が欠かせない。近年、極地で徒歩旅行をおこなう冒険家はほぼ一〇〇パーセント、プラスチック製のポート型橇を使用しているが、私は木材で自作したものを使っている。グリーンランド北部では現在でも犬橇が生活の足として利用されており、彼らに作り方を教えてもらって覚えたイヌイット仕込みの橇だ。今年は三月にグリーンランドからカナダへ徒歩でわたる計画にしている。昨冬、厳冬の極夜時期の探検ではブナ材で作った頑健な橇を使用した。ブナはちよつと重すぎたので、今年には日本にいるうちに檜材で作るつもりだ。

木橇とポート型の橇、それぞれ一長一短あるが、総合的に見ればポート型のほうに軍配があがるだろう。軽量なだけではない。海水の上を移動する北極の旅の場合、乱氷帯での引っかかりのなさを考えるとポート型のほうがかなり有利だ。多くの冒険家が使っていることには、それなりの理由があるのである。しかし私は自作の橇にこだわりたい。木橇の場合、壊れたときに現場で応急修理ができるというのが表向きの理由だが、それよりも橇を制作するというプロセス自体に価値があると思うからである。

橇を作った旅を続けるうち、私は制作という行

角幡唯介

プロフィール
1976年北海道生まれ。作家、探検家。早稲田大学卒業。『空白の五マイル』（集英社）で大宅壮一ノンフィクション賞、開高健ノンフィクション賞、梅棹忠夫・山と探検文学賞、『アグルーカの行方』（集英社）で講談社ノンフィクション賞など受賞多数。最新刊は、極夜の北極圏を80日間わたり探検しつづけた『極夜行』（文藝春秋）。

為には実存的な意味があると気が付くようになった。特に命がかかった冒険旅行の現場で、それは言える。万が一、旅の最中に橇が壊れたら移動は不可能となり、文字通り命にかかわる事態となるだろう。極地旅行において橇は命を支える切実な装備だ。そのような装備を自分で制作すると、それは冒険行為の核心に触れる重要なプロセスとなる。自分で作ってそれが壊れたら死ぬのだから、橇を自作すること自体に冒険の重要原則である自己責任の概念が実現されるのだ。そのため橇を自作すると、その橇には既成のプラスチック製品にはない魂が込められることになる。ちよつと感覚的な話になるが、橇を自作することで、その橇は、単なる橇という道具の範疇を超えて、私自身の私性の宿った分身のようなものとなり、旅によって実現される私の世界は確実に深まりを増すのである。

これから材を発注して鋸で切断して鉋で削っていくが、どの材がいいか検討している時点で旅は始まっている。ぐさぐさに積みあがった乱氷帯を乗り越えるシーンを想像しながら橇を作ることには、言いしれない喜びがある。

月刊 みんなぱく

3月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
橇を作る
角幡 唯介</p> <p>特集 万博資料収集団</p> <p>2 特別展縁起
野林 厚志</p> <p>4 万博から民博へ
石毛 直道</p> <p>5 万博のあとに民博を
松原 正毅</p> <p>7 梅棹忠夫アーカイブズに見る収集団の奮闘録
内田 吉哉</p> <p>8 未来から見た過去への口惜しさ
吉岡 乾</p> <p>9 本館展示で EEM 資料を見る
丹羽 典生</p> | <p>10 OOLでみました世界のフィールド
中国の携帯用万能充電器
横山 廣子</p> <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
ポリネシアの鳥人
印東 道子</p> <p>16 新世紀ミュージアム
プロイセン文化財 ベルリン国立博物館群
ヨーロッパ諸文化博物館
森 明子</p> <p>18 手芸考
被災地で手芸を「仕事」にする
金谷 美和</p> <p>20 ながなんちゃ
新地名誕生!
吉枝 聡子</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|